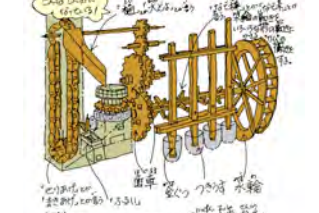


八雲町郷土資料館農機類標本台帳

一般名称: 水車		現地の通称:	
資料種別: ☐ 製品-実物 ☐ 製品-レプリカ ☐ 製品-模型 ☐ 製品図面 ☐ 写真等 ☐ 図書掲載 ☐ その他			
資料種類: ☐ 人力用具 ☐ 手押し式 ☐ 耕耘用 ☐ 調製用 ☐ 畜力用具 ☐ 乗用式 ☐ 施肥播種 ☐ 施設類 ☐ 原動機具 ☐ 牽引式 ☐ 管理用 ☐ 機素 ☐ トラクタ具 ☐ 定置式 ☐ 収穫用 ☐ その他		管理プレートNo.	統一分類記号
		台帳No. Y193	
		相手先番号等	
製作者・会社:		製造市・国名	
製造年・購入年・標本収集年			
使用目的・使用方法等	日本の水車は、日本書紀に推古天皇18(610)年に、高麗から渡ってきた僧が礪螳（てんがい、水うす）を作ったのが始まりと書くため、中国大陸からの移入である。発電所で使う近代的な水車に対してこれを在来水車という。この水車は木製で、その外径は2mから10mくらいまでである。主として用水汲上げ、精米や製粉の動力として利用されてきたが、電動奴や石油発動機が普及するにつれて急速に減少し、現在ではほとんど使われなくなった。この水車には水の作用位置により、上掛水車、下掛水車、胸掛水車などの種類がある。なお、灌漑に使う踏車も水車と呼ぶことがある。		
利用経過・収集記録・意義等	上掛水車は、車周の上から水受板に落ち込む水の重さと、流水の力とで車軸に回転力を与えるもので、適応落差は5～10m、出力も大きく、効率は90%にも達する。下掛水車は車周の下で水受板に当たる流水の力によって車軸に回転力を与えるもので、落差が少ない場合、あるいは流水を利用する場合に用いられる。効率は落差と水受板の構造によって異なるが、30～40%程度である。また胸掛水車は、車周の中央付近から水をそそいで回転させる。これは落差2～6mで使用し、効率は65%内外である。		
仕様書・解説等	標本の用途と仕様は未調査 あるいは工業用かも 右に 全体図 関連図 1-2: 水車による搗臼の構造 3: 朝倉の三連水車 4: 踏車=足踏み水車		
外観特色・関連図等			
資料の所在	公開展示室		
資料管理経過	資料追記事項		
作業メモ・追記文			